ジュゴンと沖縄の女

野生動物学研究室教授　高槻 成紀

歌が好きで、若い頃はラジオを聞き、テレビの歌番組などもよくみたが、今はそういうこともほとんどない。テレビでもその種の番組はなくなったようだ。そうした中で最近 You tube というものの存在を知った。これはいい。CD のアルバムなどでは、数曲の中で聞きたいのは 1, 2 曲しかないので、なんだか損をしたような気がする。中には掘り出し物もあるのだが、そうでないことのほうがはるかに多い。その点、You tube では気に入ったものだけを選べる。これが聞きたいと思ったらすぐに聞ける、まるで魔法の器械だ。それになんといっても、関連の曲が紹介されていて、同じアーティストのほかの曲とか、別の人の同じ曲が聞けたりする。

Ji ma ma というおかしな名前の歌手に「大丈夫」という歌がある。今となってはこの歌をどうして見つけたのか覚えていないが、なにかの偶然で「出会った」ものだ。歌詞もメロディーもとてもいい。テーマはやさしさということだろうか。私たちが若い頃のテーマであった恋情というのではなく、もう少し広い人間愛という感じがする。それになんといっても声がいい。美声ではなくかすれたような質感で、なまりというか、ふつうの声楽家（このことばもなんとおかしなものか）のように規格にはまった声ではないのが魅力的だ。沖縄の人のもつやさしさや芯の強さを感じさせる。

もうひとつの歌は偶然ではなく今朝（2009 年 10 月 3 日）の朝日新聞に出ていた特集に Cocco という人の「沖縄の海を守りたい」という歌が紹介されていたので、You tube で聞いてみた。まだなじんでいないし、歌としてはもしかしたらそんなに好きにならないかもしれないが、歌を歌う前のスピーチが感動的だった。自分のことばを確かめるように訥々と話す。そのスピーチは「沖縄の女だから」ということばから始まる。「私は東京の女です」という若い女性がいるだろうか。この短いことばに、自分は「やまとんちゅう」ではない、「男ではない」という意志が感じられる。今の日本というのは、どこに住んでいるとか、自分のジェンダーというのを意識しないし、させない。こうした表現に Cocco という人の非凡さを感じた。それに続くことばの中にも、いくつもはっとさせられるものがあった。「ジュゴンをみたこともない人がつけたジュゴンの丘という地名」とか「正しくないとわかっていても受け入れざるをえないこともある」といったことばに、この人の思考の深さを感じないではいられなかった。

ことばに沖縄の抑揚があり、考えながら話すそのゆっくりしたスピーチに会場は引き込まれてゆく。保全活動の専門家の理論的な話でも、よく準備された情報のたくさんある演説はよくあり、聴衆は「学ぼう」とする。だが、Cocco は「こんなにたくさんの人の前で自分のことを話させてもらって申し訳ないけど」といった正直なことばを友達に話すように語る。会場は水を打ったように静かになって、その歌は始まる。美声とはいわれないだろう声−ざらつきがあるゆえに魅力的な−が聞く者にやすらぎを与え、作

者が何を感じ、何を訴えたいかを聞きたい気持ちにさせる。

私は反戦などの政治的活動でもそうだが、動物の保全には暖かい心が不可欠だが、しかし戦いに勝つにはクールな分析と計算が必要だと思っている。Cocco のスピーチはしかし、まったく情緒的なものだった。人が破壊しつづけてきた海にジュゴンが戻ってきてくれたと言いかかったとき、すでに彼女の声は涙声になっていた。そのことばを聞きながら、「そういうことは独りよがりになるからだめだ」とういつもの私がいたが、その場面ではそうしたさかしらす言い分は無力で、ジュゴンが戻ってきたことに理屈抜きに感動した芸術家の心を尊いものだと感じる私のほうがまさっていた。

私を包んでいたのは 19770 年代の、まだローティーンだった私たちがいた時代の空気に似たものだった。よくも悪くも男は男らしく、女は女らしく生きるように育てられた。富や力は醜いもので、純粋な心はそれらと戦って勝つものだという思いがまだ息づいていた。日本の社会は汚職に満ちているが、アメリカでは若者が自分の国の戦争に反対して立ち上がっているらしかった。兵士の前に花を突きだした少女の勇気が兵士に銃を捨てさせたといった話が感動的に伝えられ、自分たちも立ち上がろうという声があり、そうしたいと思った。歌を作って歌えばその純粋な心は伝わると信じていた。それらはすべて錯覚であったが、それでもあの時代のもつ空気には嗤い飛ばすものしかなかったとは思いたくない。

私が言いたいのは沖縄のアーティストの歌から、沖縄にはまだ 1970 年代の空気があるのではないかということと、いやそうではなく、沖縄という文化は長い歴史の中で強国に翻弄され、辛酸をなめながら、なおそれを許してきた大きさと楽天性と純粋さがあり、単に 30 年遅れているということではないのではないかということである。

以上は単細胞な私が動物の保全などを考えながら感じたことで、もうひとつミーハーな私として思うことがある。

Ji ma ma にしても Cocco にしても、歌が自然体で無理したところがないために、初めて聞いてもなんだかなつかしいような気になる。そしてこうした才能豊かな人が輩出するということについてである。「ちゅらさん」で沖縄がブームのようなことになった。その前から安室奈美恵とかビギンとか、個性的な人材がたくさんいる。それを思うと、沖縄の社会には何か違うパワーのようなものがあるような気がする。

その中でも私たちの世代に今もなお燦然と輝いているのは南沙織という人である。「17 歳」という歌でデビューしていくつもヒット曲がある。今聞けばどれもあまり意味のない歌詞ばかりだが、南沙織という人の魅力が溢れていた。黒い瞳と黒いまっすぐな長い髪に白い歯、やさしそうだが芯の強そうな表情と、知的な雰囲気。私たちは熱烈に支持した。吉田拓郎は「シンシア」という歌を作って捧げた。人気絶頂にして突然結婚し、その後まったく人前に出てこない。まるで夭逝したかのごときである。だから私たちの世代のおじさんには十代のままの南沙織しかおらず、彼女の曲を聴くと自分たちもその頃にもどれるような気がするのだ。南沙織のヒットは多分に当時の芸能界の作戦の成果という気

がするが、その後のアーティストの活躍はそれだけではあるまい。

なんだか自分たちとは違う存在としての沖縄。日本ではありながら、大和民族とは確かになにか違う大切なものをもった社会があって、そこからときおり類い稀な人が生まれてくる。それが今は音楽という分野に限定されているが、必ずやもっとさまざまな分野にも影響力のある人が生まれてくるに違いないという気がする。